

特別賞

1-15 飛騨高山

所在地——岐阜県高山市

表彰対象——旧城下町の商家町・三町筋の、上三之町を中心とする
環境保存の努力とともに、よく維持されてきたサインの伝統様式。

代表者——高山市長 元仲辰郎

上三之町保存会会長 原田幸彦

特別賞

16-35 木曾妻籠宿

所在地——長野県木曾郡南木曾町

表彰対象——歴史地区集落保存のための実験的な試み、地域修景計画における、
復原型サイン・ポリシーの成果。

代表者——南木曾町長 片山亮喜

南木曾町観光係長 小林俊彦

アドバイザー——長野県知事 西沢権一郎

調査・基本計画・設計——東京大学建築科教授 太田博太郎

および、太田氏をリーダーとして参加した学界グループ

備考——長野県明治 100 年記念事業、3 カ年計画で1971年に完成、
宿場集落復原保存事業

特別賞

36-50 倉敷

所在地——岡山県倉敷市本町

表彰対象——歴史的美観地区保全のための先駆的な努力の蓄積と、
伝統と現代の微妙な調和。そこにみるサインとシンボルの、独自の位置。

代表者——倉敷市長 大山茂樹

備考——倉敷市保存美観地区



高山

小京都と呼ばれる飛驒の高山は、乗鞍岳のふもと、飛驒高地の山ふところに、珠玉のようにひそむ古都である。豊臣時代の領主・金森氏の城下町として開かれ、元禄年間に天領となり、飛驒の匠の上古いらいゆかりの深い上方文化と、近世江戸文化の交錯するところに、磨き抜かれてきたような伝統文化の香りを漂よわせている。

市の中央を流れる宮川をこえて、古い寺院の立ちならぶ東山にかけての一角が、城下町時代に商家町として開かれ、高山の経済・文化をになってきた上戸町人戸の町・三町筋である。上・下一之町から三之町まであるその町筋のなかでも、とくに町並みとしてよく保存されているのが上三之町。先ごろ文化庁が策定した歴史環境保存地区にも、この界わいが選ばれている。



1

1・2 上三之町の町並み。低い庇、深い軒の出。高山格子といわれる独特のしゅい色調、しっとりとした光沢の格子戸がそのかげに、縦繫連子や子持連子、水腰格子に木連格子と、微妙にパターンを変化変化させながら、こまやかな陰影を連ねてゆく。そんな町並みのそこ、ここから、もの静かに、しかし表情ゆたかに語りかけてくるのが、江戸の昔そのままの古い看板や伝統的シンボルである。芝居がかった街頭の小道具類も、高山情緒を色濃くもりあげる。

3 この町には、有名な旅籠屋が2軒あり、それぞれサインの趣向を競いあっているのがおもしろい。その一方の坂口屋が経営する、喫茶・唐子のエクリテリア。渋い朱ののれんのかげにのぞく、大戸の障子の店名と、《春夏冬中》で《あきないちゅう》としゃれのめした営業表示。傍らの天水桶も、ところをえてみえる店構えと町並みである。

高山・妻籠・倉敷
〈サイン環境〉の思想をめぐって

レポーター——坂野長美



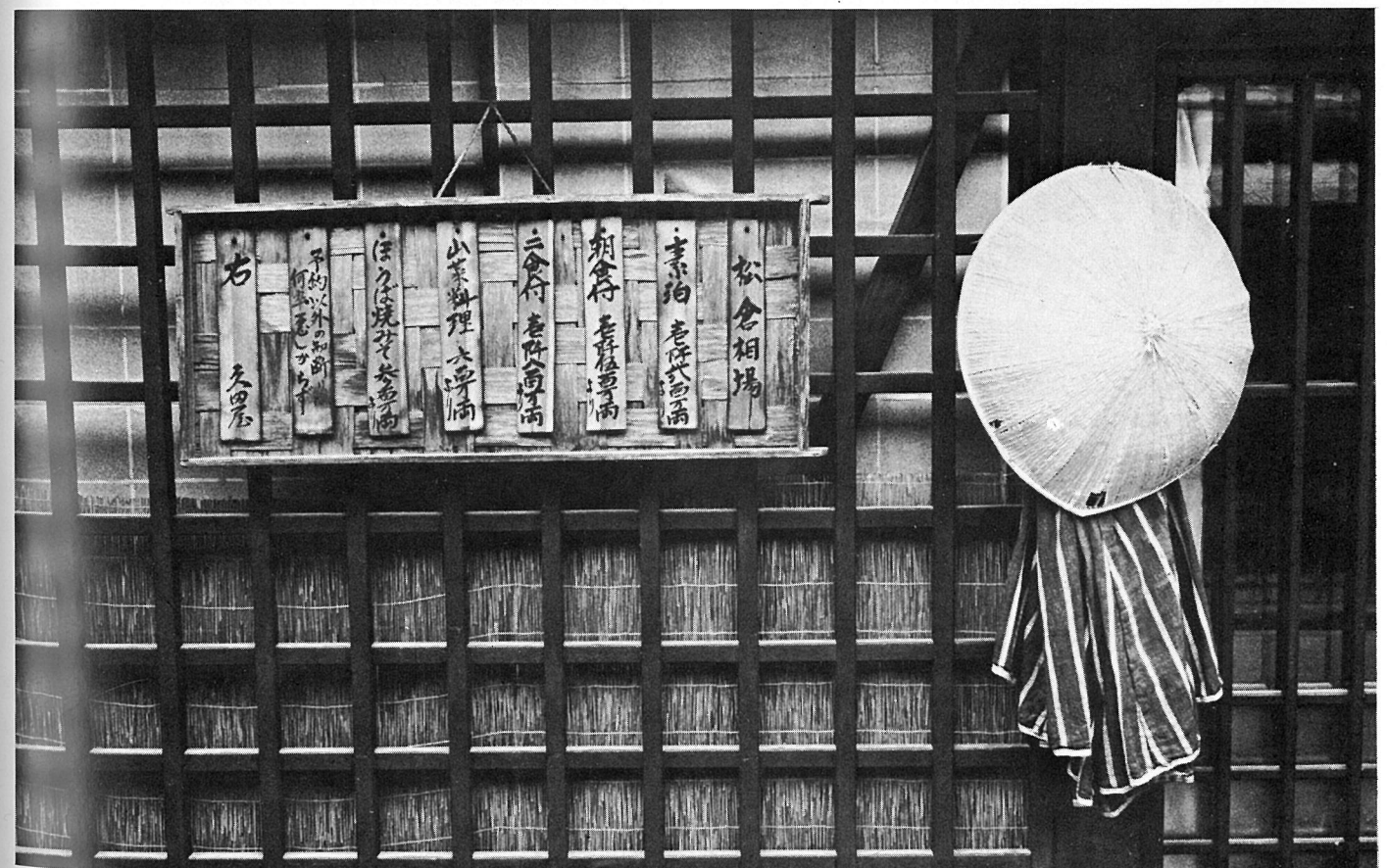
2



4



5



6

4 上三之町でいちばん古いという、江戸時代いらいの看板。こうじ味噌醸成用の器具を、そのまま使った実物看板である。天然みそ製造元・大のや。

5 同じく、みそ製造元の古色の象形看板。みそは山国の貴重な蛋白源。地みその種類も多く、名物・ほう葉焼きみそのような、独特の料理法も発達している。

6 有名な旅籠屋のもう一方の久田屋。三度笠と旅合羽のシンボルに、松倉相場の値段表、とこっている。松倉相場とは、高山・松倉観音の絵馬市で、景気づけに呼ぶ値段。100円が100万両。



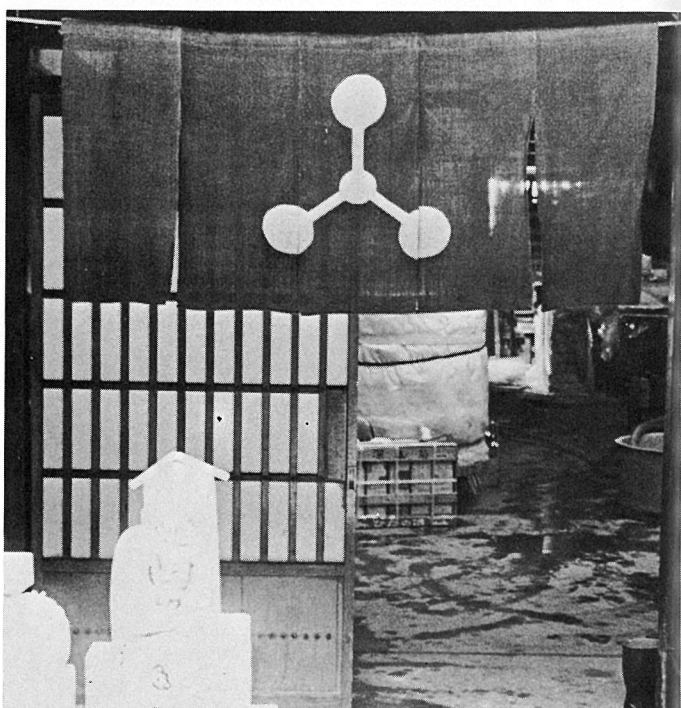
7



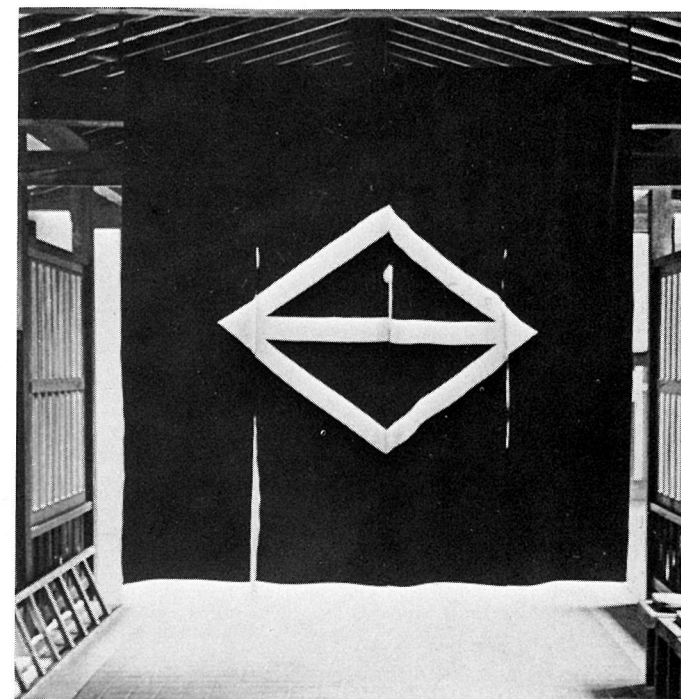
9



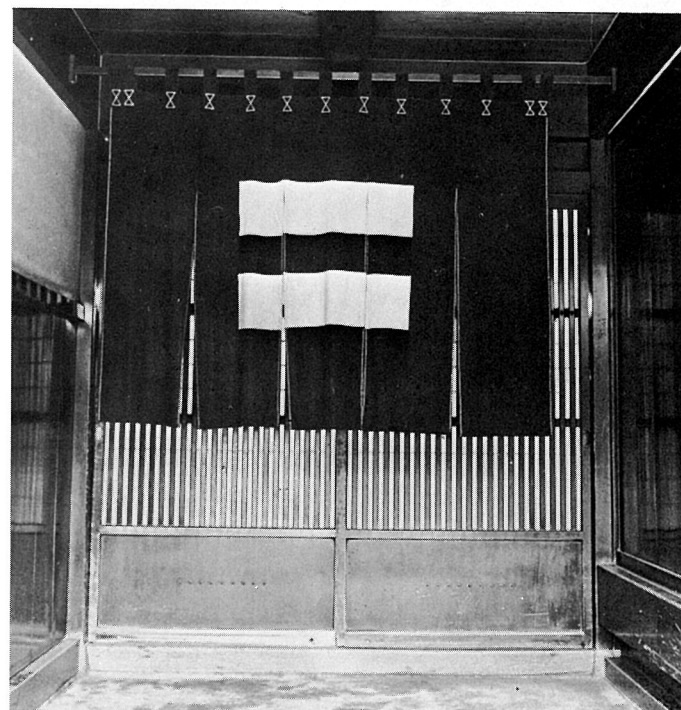
8



10



11



12

7 上三之町の出外れにある、有名料亭・すぎきの経営する辻茶屋の、のれんと火の用心行灯。高山では、のれんが実に美しく、エクステリアに生かされている。火の用心行灯も高山独特。火の用心のサインのほかは、両脇に月・星のくり型があるだけで、店名も何もない。いわば店から町へのご献灯型サインである。

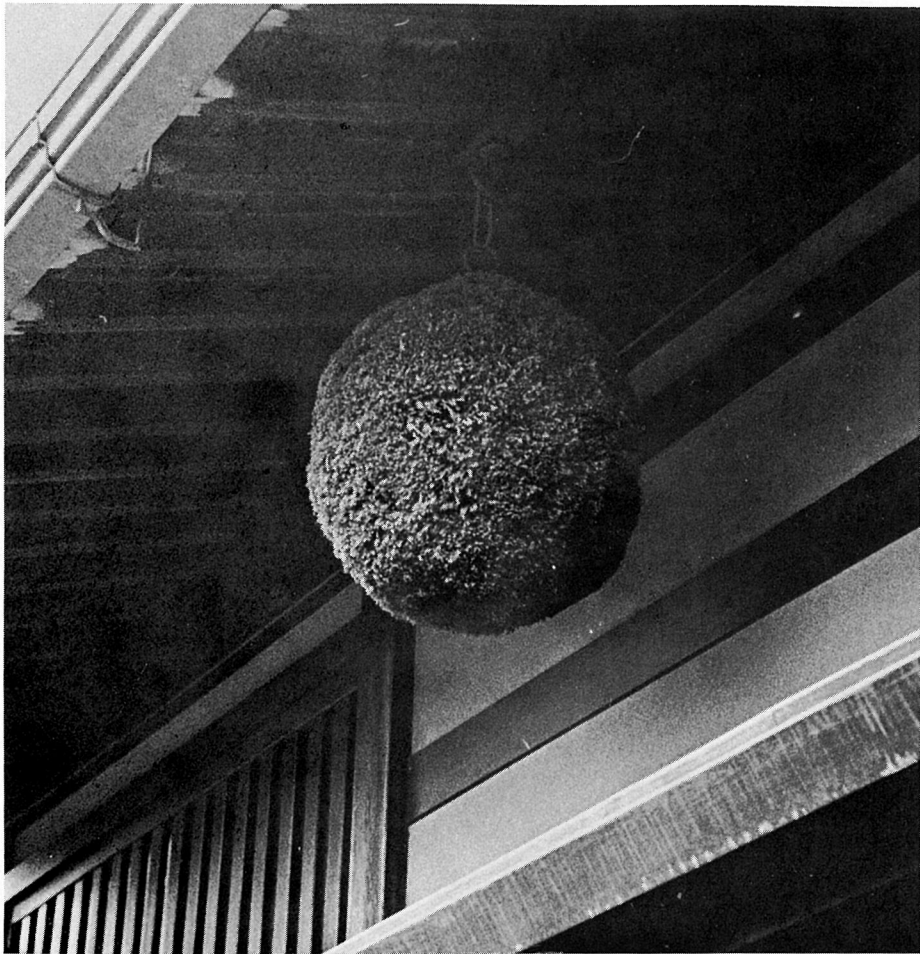
9 表具師職の様式的特長で目をひくのれん。小京都・高山の趣きは深い。

8 上三之町には造り酒屋が2軒あり、酒屋の伝統シンボル・杉玉を向い合わせた店先で、蔵出しの原酒を商っている。その一方、山車醸造元の紋章入りののれん。

10 それに相対する、深山菊醸造元ののれん。紺地あるいは朱地ののれんに、白く染め抜かれた紋章の伝統的様式美が、高山には今も多様に生きている。

11 上三之町にある、典型的な町屋建築・打保屋（現平田記念館）ののれん。ここはもと和ろうそくの老舗で、当時の看板なども残されている。

12 上三之町ほどの環境的なまとまりはないが、三之町界わいには上・下を通じて、民家建築としてすぐれた町家が残っている。日下部家とならぶ代表的な町家建築・旧吉島家（いずれも重文）ののれん。この紋章は、なかでも現代感覚に通じるものがある。



13 酒屋の杉玉。新酒が醸造されたことのサインとして店頭に掲げられたものが、そのまま造り酒屋のシンボルとなり、戦前まではどの町でも酒屋といえば見かけられた。お酒の神様・三輪明神を祭るため、神杉を束ねたのがその起こりといわれる。

14 日下部民芸館に並んでたつ吉島家住宅。現在は市に委譲されて、高山市特産館となり、同じく公開中。もと造り酒屋だったので、軒先に杉玉がみえる。火の用心行灯も置かれている。

15 民家重文指定第1号の日下部家住宅は、いま同家経営の民芸館として公開されている。その、ケヤキの銘木の美しいサイン。



誇り高い伝統の町・高山

●高山は、地理的に孤立した山国の都市という、自己完結型の文化圏。有名な高山祭に象徴されるように、そのなかで高い完成度に達した伝統の生活文化を、いまに奇跡的に保持し続けてきた町である。その周辺の農村地域も含めて、民家と伝統工芸、民俗芸能の宝庫であり、古式床しい年中行事の数々もほとんど損われずに生きている。

しかしそのイメージがあまりに美しいだけに、初めてこの町を訪れた人がまず味わうのは、あるいは肩すかしに似た軽い失望感なのかもしれない。今日の高山は、人口約5万の小都市ながら、伝統の木材・木工を中心とする地場産業も盛んだし、市内外および日本アルプスの観光基地としても繁盛している活気に富んだ町である。その活気が、とくにメイン・ストリートの商店街を、大小無数の看板や商品広告が氾濫し、新建材型の近代化が進行する雑然とした町並みに仕立てあげているのは、高山だからといって別に例外ではない。

それだけに一步上三之町へ踏みこんで、イメージどおりの高山に出会ったときには、目を洗われるような思いがする。電柱も裏手に移されてこの通りには1本もないし、車の通過交通を禁じていないのは気になるけれど、路面駐車車の車1台見当らない。単体としてすぐれた民家建築は、むしろ明治以降の再建家屋の多い二之町界わいに集中している。しかし環境としてよくまとまっているのは上三之町をおいてはなく、家屋の建設年代もより遡るため、天領時代の高山のおもかげはこちらのほうに濃い。また重文級の民家が、日下部家にしろ吉島家にしろ、すでに当主は他に住居を構えて、文化施設として公開し維持されているのに対し、上三之町はそこに、先祖代々の家を受けつぎ家業を守る人々が住み、いわば生活のある文化財として維持されているのである。

由緒ある三町筋のなかでもなぜとくに、上三之町だけがこのように、高山の奇跡のエッセンスのような形で残ったか……。SDA賞通知とともに市に問いあわせたその返事には、中心人物として上三之町保存会長・原田幸彦氏の名があがり、外部者の介入は全くない、とあった。なるほど高山ならそうか、とうなづける現地取材、次のとおりである。

●まずインタビューを願ったのは、高山市長・元仲辰郎氏である。高山はアメリカのデンバー市と姉妹都市のよしみを結び、国際交流も盛んだという。飛驒民家のもう一つの流れ・大屋根の農家のように重厚な風貌の持主の元仲市長は、その話になると弁舌よどみなかったが、上三之町についてはややいいしぶりながら、「卒直にいいましてこれは、市が指導してこうなっているではありません。」と、その間の事情を説明された。もちろん市としてもこの町の保存には意欲的であり、これまでもいろいろ働きかけてはきた。しかしここではとくに上からの規制をきらい住民気質が徹底しているために、提案段階にとどまっている……と、「ですからあの町を今まで維持してきたのは、私どもの力ではなくて、あすこに住まっている人たちの、城下町時代いらいの一つの誇りからきたことです。」

どうやら市と上三之町とは、いささか平行線のようにみえたが、市としても1昨年この地を視察した今文化庁長官の、「町全体を残そう。」という提案に刺激されて、文化遺産の保存にのりだしている。その手初めに白川郷の合掌造りを移築した飛驒民俗村を2年が

かりで建設し、他方市中にもまだ残すべき町並は多く、その保存対策制度化も研究中、ということだった。上三之町にも最近では、土産物屋などが増えてきたことへの批判も少し勾わせて、市長はその飛驒民俗村には売店一つないと、観光エネルギーのもたらす商業化現象に抵抗する、飛驒びとの強い誇りをのぞかせた。そういえば、旧吉島家住宅の高山市特産館も、入場無料だったのが嬉しい。

●次に上三之町保存会の原田幸彦氏。この町に2軒ある造り酒屋のその一方、山車醸造元が原田家だった。やがて現われた氏の、まだ40才という若さにまずおどろく。しかし高山の長老世代が古格正しく維持してきた伝統と、現代との急激な接点には、やはり氏のような第2世代の若い視野と行動力が、なくてはかなわぬもののだろう。高山では市の青年商工会議所が、文化財保護の啓蒙運動や、伝統芸能継承の中核体となって活躍している。原田氏もその有力なメンバーである。

上三之町保存会が、同町約30軒の家々の親睦会から発展して組織されたのは昭和40年。いらい公的な規制を固辞して、住民自治に徹する体制で一貫してきている。かつての天領時代には、町人はいくら経済的実権をにぎっても、表向きはあくまでもお上に遠慮しなくてはならなかった。伝統の高山町家が、ゆに3階分の棟高をもちながらも、実際以上に低い軒高にみえるのは、分相応に寸足らずの柱を使った、という意志表示のためといわれる。そのかわり町人層の誇りとエネルギーは、深く内へ内へとこめられた。表向きの簡素さに対して奥向きの座敷まわりには、思い切りぜいがこらされたというのもその現われ。そうした誇りとお上への抵抗精神の伝統が、ここ上三之町に凝集して、いまも生き続けているように思えた。

しかし、保存会員全員が住民自治の精神では一致していても、観光に結びついて直接利益を受けるのと、そうでない場合とではかなり気持の食い違いもおきてくる。その辺が若い保存会長の苦労の種も尽きないところだが、そういう人々の心を一つに結びつけるのが例の高山祭だという。「高山の人間は変わってしまてね、年寄りも若い者も、子供まで、祭といい屋台ときくと目の色が変わるんです。」——上三之町も、恵比須台という、飛驒の匠の粋をこらした名屋台を持っている。原田氏はその保存会長をつとめている関係で町の保存会長にも選ばれたのだそうである。

この伝統的地域社会の心情が、そのようにして世代間の断絶もなく継承される限り、古い町並みも失われはしない……と思いたいところだが、「そこがやはり難しくて」と、原田氏も先行きの不安をもらしていた。なにしろどこからも規制されないかわりに援助も受けず、家屋維持もすべて自費である。長老世代の健在なうちはいいとして、ゆくゆく若い世代に代替りすれば、近代生活を望む声も出てこよう。その辺が生活文化財保存問題の微妙なところである。住民自治の限界の先の大きな施策を、市にも国にも望みたい。

おわりに、このような上三之町の体制上、看板類に対しても不文律の自主規制でのぞんでいる。そのなかで、老舗の誇りをこめた古い看板が大切に維持され、新しい工夫にも町の旦那衆としての、伝統に根ざした美意識と趣味が競われる。近世日本が達成したサイン文化の高い水準が、ここでは現代に直結しながら生き続けているとみえた。——退出しようとして、蔵出しの原酒・山車をふるまわれた。高山は地酒文化も豊かで造り酒屋が多く、それも町並み保存に一役買ってきている。そこで醸される地酒は昔ながらの手作りの味。高山にのれんが今も生きているのも、やはり伊達ではないようだ。

